

雑司ヶ谷研究 20

絵地図と国土地理院旧版地図より読み取る道路形成の歴史

Zoshigaya Study 20:
The History of Road Formation as Seen in Old Geographical Survey Institute Maps

杉浦 美鈴* 薬袋 奈美子** 大山 祐加子***
Misuzu Sugiura Namiko Minai Yukako Oyama

原 わかな**** 古賀 碧*****
Wakana Hara Midori Koga

*株式会社テクノワークス **建築デザイン学部建築デザイン学科 ***独立行政法人都市再生機構
****一般財団法人国土技術研究センター *****人間生活学研究科

抄 録 木造密集市街地である豊島区雑司が谷一～三丁目は多数の路地が存在し、路上でのコミュニケーションや生活の場として利用している。これらの道路がどのように形成されたかを絵地図と国土地理院旧版地図を用いて変遷をおった。また地図から知りえた事を地域住民からのヒアリングと合わせて確認した。江戸、明治初期は近郊農業と鬼子母神堂を中心とした町家であり、雑司ヶ谷の骨格となる道路が形成された。時代がくだると建物棟数が増加及び宅地化し、街区内の細い道路が形成されたことがわかった。

キーワード：絵地図，国土地理院旧版地図，建物棟数，宅地，道路形成，建築基準法

Abstract Zoshigaya, Toshima-ku areas 1, 2 and 3 are densely populated zones of wooden houses. This paper reviews the process of formation of these housing developments. The research is based on observation of maps provided by the Geographical Survey Institute, followed by interviews with local residents whose ancestors also lived in Zoshigaya. In the Edo and Meiji periods, Zoshigaya was a suburban farming area with some shrines and temples, and the second homes of rich families. The number of houses started to increase rapidly from the Taisho period.

Keywords: old Geographical Survey Institute maps, number of houses, housing lots, street formation, building code

1. はじめに

東京には多くの狭隘道路が存在し、震災などの災害時には危険な場所として拡幅が進められているが、進まない地域も多い。東京都震災対策条例の地域危険度¹⁾が5段階中3, 4である豊島区雑司が谷一～三丁目もそういった地域である。しかし雑司が谷の路地は防災面での危険があると言われる反面、路上でのコミュニケーションや生活の場として利用して

いる²⁾。

雑司ヶ谷研究9³⁾において現在の雑司が谷一～三丁目を対象に表1の江戸時代から平成まで24種の地図を用いて、時代の変化を比較し狭隘道路の形成を考察した。道路の形成と宅地化は密接に関係していることから、現在まで続く木造密集市街地の経緯を整理し住宅地としての発展の背景を探った。江戸、明治初期は鬼子母神堂を中心として町が形成され、時代がくだると建物棟数が増加した(地図(1)～(5))。

その後大正期に特に宅地化し同時に多くの道路が形成された（地図(7)～(12)）。

本稿では地図(24)の平成30年に豊島区道路台帳より建築基準法 42 条、公道私道、幅員の分布を重ね作成した図を江戸期、明治期、大正期、昭和初期に分けて考察し、狹隘道路の形成過程を住宅地の開発の視点との関係で考察することを目的とする。過去の地図の重ね合わせに加え、地域住民と豊島区職員ヒアリング調査から細街路の形成経緯を明らかにする。

表 1：雑司が谷の変遷調査に用いた地図

時代	No.	発行年	地図名
江戸	(1)	正徳 6(1716)	武蔵国豊島郡高田村絵図
	(2)	明和 9(1772)	武蔵国豊島郡雑司谷村絵図
	(3)	嘉永 4(1851)	音羽・目白・雑司ヶ谷絵図
	(4)	嘉永 6(1853)	嘉永新鑄雑司ヶ谷・音羽絵図
明治	(5)	明治 14(1872)	2 万分 1 フランス式色彩地図
	(6)	明治 43(1910)	1 万分 1 豊島区地域地形図
大正	(7)	大正 5(1916)	1 万分 1 豊島区地域地形図
	(8)	大正 12(1923)	1 万分 1 豊島区地域地形図
	(9)	大正 14(1925)	東京府下高田町・戸塚町
	(10)	大正 15(1926)	東京府下高田町中部住宅明細図
	(11)	大正 15(1926)	東京府下高田町北部住宅明細図
	(12)	大正 15(1926)	1 万分 1 豊島区地域地形図
昭和初期	(13)	昭和 4(1929)	1 万分 1 豊島区地域地形図
	(14)	昭和 5(1930)	東京府北豊島郡高田町全圖
	(15)	昭和 8(1933)	豊島区詳細図
	(16)	昭和 14(1939)	1 万分 1 豊島区地域地形図
	(17)	昭和 20(1945)	1 万分 1 豊島区地域地形図
昭和	(18)	昭和 34(1959)	1 万分 1 豊島区地域地形図
	(19)	昭和 59(1984)	1 万分 1 豊島区地域地形図
	(20)	昭和 62(1987)	1 万分 1 豊島区地域地形図
平成	(21)	平成 1(1989)	1 万分 1 豊島区地域地形図
		平成 6(1994)	1 万分 1 豊島区地域地形図
	(23)	平成 11(1999)	1 万分 1 豊島区地域地形図
	(24)	平成 30(2018)	5 千分 1 国土地理院基礎地図

2. 雑司が谷の道路と市街化の変遷

図 1 に江戸期、明治期、大正期そして建築基準法制定の 1950 年までを昭和初期とし、地図を時代ごとに重ね合わせ、道路ができた時期と宅地化を中心とした市街化された部分を示す。江戸期地図(1)～(4)は絵地図のため、鬼子母神堂、法明寺、護国寺などの場所から道路を判断した。江戸期の道を色別標高データと重ねた図 2 より、色の境目、つまり等高線沿いと道路がほぼ一致する。自然地形に合わせて、人や獣が歩いた所が道になっていったのではないかと想像できる。江戸期地図から、多くの参詣客

を集めた鬼子母神堂を含む寺社があり、特に鬼子母神の参道には店が連なっていたことなどが既に確認されている他は、近郊農村としての土地利用もされ、茄子の生産でも知られた⁴⁾。明治期である地図(6)は縮尺があり、土地利用の詳細も確認することができた。一丁・二丁目の南側にまばらに建物の表記がある。鬼子母神堂の南側には北辰社牧場の牛舎⁵⁾がある。大正期になると住宅の密度が高くなり、一・二丁目南側は建物が密集している。地図(11)から生活に欠かせない呉服屋等の商店があったことが確認でき、生活の場として町が発展していていること

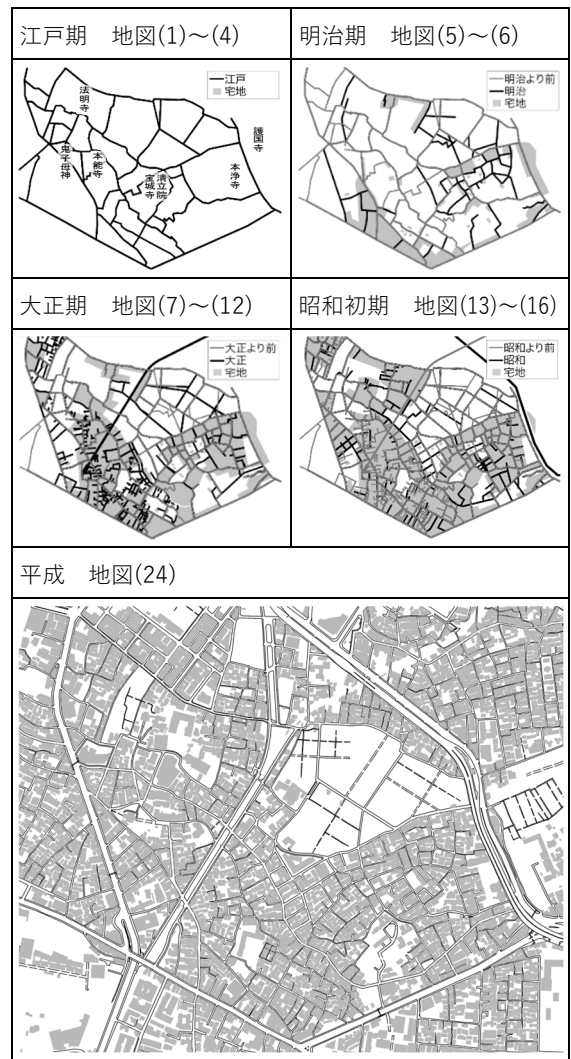


図 1：時代別道路と宅地の重ね合わせ図

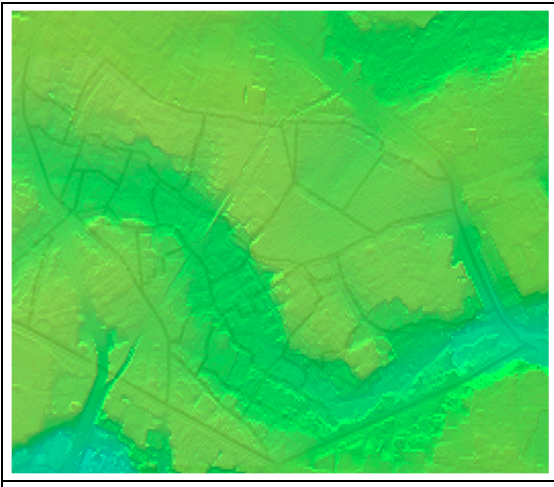


図 2 : 江戸期の道路と国土地理院色別標高図の重ね図

が確かめられる。昭和初期になり弦巻川の近くまで人が住むようになった。1932 年に弦巻川が暗渠化し弦巻通りとなり、地図(15)から弦巻通りを確認できた。

雑司が谷の居住地としての発展の歴史を概観する。地図(5)では畑が多くを占めており、地図(6)の 1910 年頃から建物棟数が増加している。1923 年の関東大震災後に焼け出された人々が数多く住み始めたことで宅地化が進んだと地域住民は(注 1)話し

ていた。確かに 1923 年の地図(8)と 1926 年の地図(12)の 3 年間に 31 件の増加はある。しかし関東大震災以前から、宅地化は進んでおり、関東大震災だけが現在の密集市街地の基盤をつくったわけではない。

日本の総人口は明治維新後に急増し⁶⁾、東京近郊に住宅地が展開していたことに合わせて雑司が谷にも人口が流入し、建物数は自然に増加したと推測する。また、1925 年に王子電気軌道社(現在の東京さくらトラム(都電荒川線))の開通⁷⁾により、交通便利性があがったことは、宅地化を後押ししたと考えられる。第二次世界大戦の戦前地図(16)と戦後地図(18)を比較する限りはその影響を読み取ることはできなかった。

1994 年の地図(23)から 2018 年の地図(24)の時期にかけては、住宅数が増加している。これは、不動産市場が回復したことに加え、移転や相続に伴う個別の宅地の更新時に、1 宅地だったものが小規模な複数宅地へと細分化される傾向がみられるようになったことも関係するであろう。上記のような環状第 5 号線に伴う用地買収による建て替えも少なからず起きていたこと、また副都心線雑司が谷駅が 2008 年に開通したことに伴う、宅地需要の高まりもその背景にあると考えられる。

表 2 : 狹隘道路に係る法令の整理

明治時時代	各地の条例、防火のため	6尺(1.8m)	東京府布達甲第27号、防火路地線並二屋上制限規則
1919年	市街地建築物法	9尺(2.7m)	
1938年	市街地建築物法形成	4m	
1950年	建築基準法42条	4m	
1項	1号 道路法による公道	4m以上	
	2号 開発許可等で築造された道路	4m以上	
	3号 都市計画区域が指定される以前からの道路	4m以上	
	4号 事業執行予定の特定行政庁が指定した道路	4m以上	
	5号 道路位置指定による道路	4m以上	
	2項 都市計画区域が指定される以前から存在した4m未満の道で特定行政庁が指定したもの	4m未満	
	3項 土地の状況により4m未満で指定された道	2.7m以上	
	4項 幅員6m未満の特定行政庁が認めて指定したもの	6m未満	
	通路 建築基準法に指定されていない道路を豊島区では通路と称している		

参考文献 16)～27)を参考に作成

3. 建築基準法、公道私道、道路幅員と道路変遷の関係

3-1 道路幅員の規定と道路の実態

加藤ら(1986)⁸⁾によると住宅地内の道路幅員は長屋建築規則による地域毎の3尺(0.9m)以上という規定が始まりである。その後1919年市街地建築物法で9尺(2.7m)以上と定められ⁹⁾、1938年に4mと改正された。現在は1950年制定の建築基準法42条1項にて「道路」とは原則幅員4m以上のものと定められている。建築基準法制定以前から存在する現在4mに満たない道路は42条2項によって道路とみなされ、通称「2項道路」や「みなし道路」と言われている¹⁰⁾。これらの法令の変更の経緯を整理したものが表2である。更に表3に雑司が谷一～三丁目の建築基準法42条の認定に基づく図を示す¹¹⁾。また、建築基準法では道路と指定していないが通過交通があるものを豊島区が「通路」と定義している。区が所有している「通路」は区有通路条例¹²⁾で定められている。

3-2 公道私道の区別による道路への対応

建築基準法では建物を建てるための接道義務の道路を決めているのに対し、道路法¹³⁾では道路の管理者を定めている。建築基準法と道路法との関係を表3ように整理した。例えば「通路」は建築基準法の道路ではないが、区が管理していれば「公道」になる。建築基準法上での道路認定をしても個人が管理していれば私道になる。雑司が谷には通路であり公道であるとされた道もある。

公道、私道に指定することはメリットとデメリットがそれぞれある。豊島区にとって公道にするメリットは上下水道の交渉をしなくて良いことであり、デメリットは舗装の整備管理をしなくてはいけないことである。所有者にとって私道にするメリットは財産になることであり、デメリットは自身で管理しなくてはいけないことである。以上のように一概に公道に指定すれば良いというわけではない。

豊島区ホームページの私道助成制度のご案内¹⁴⁾には、私道は皆さまの財産のため区で工事を行うことはできませんと書かれている。しかし日常生活に欠かすことができない私道の排水設備や舗装について、道路交通環境の改善を支援するため、予算の範囲内で補修等の工事費の一部を助成いたします、と

私道助成制度のあらましが書かれている。私道は所有者の権利を尊重しつつ、区が事業を進めようとしていることがわかる。

3-3 道路種別の時代ごと分類










豊島区道路台帳より公道私道・建築基準法42条・道路幅員を2018年国土院地図に重ねて作成したものを、江戸期・明治期・大正期・昭和初期に分類した図を図3から図5に示す。また、雑司が谷一～三丁目の道路本数をカウントし、雑司が谷の道路区分の割合を把握した。カウントにあたっては、交差点間を一本とし、一本の道でもほぼ直角に曲がる部分までを一本と数えることとした。その結果雑司が谷地域内には、周辺の大街道を除くと、623本の道を確認することができた。

図3を見ると1項1号道路に指定されている道は、多くはないものの、雑司が谷全体を貫通するように構成されており、かつ江戸期から存在していたものが多いことがわかる。また、鶴巻川の暗渠化に伴い形成された鶴巻通りが昭和初期の図より確認できる。図3にて赤色で示す建築基準法の道路にはならない「通路」が昭和初期に多く確認できる。即ち現在狹隘道路として扱われている多くの道が形成されたことがわかる。市街地建築物法で示された、9尺の道の名残と推定されるものが多いのは、この時期の道路形成量が多いことが関係しているであろう。当時のルールを順守する形で住宅供給が進められた結果であるとも言える。

図4で公私道の区別を確かめると江戸期に形成された道の大半は現在公道であり、江戸期の道が明治期以降にも道という共有財産として引き継がれていた。しかし、大正期に私道が増え始め、昭和初期、そして平成期にかなり多くの私道が町中に形成されたことがわかる。またこれらの大半は行き止まり道路であり、大きな敷地を分割して宅地が形成されたために、多くの行き止まり私道が形成されたことが読み取れる。

図5は道路幅員との関係を示したものであるが、江戸期からある道は3m以上の幅員が確保されていることが多い一方で、明治期・大正期に形成された短い道は幅員1.9m以下のものが多い。これは、宅地内の通路として利用されていたものが、建築基準法の一敷地、一建物の原則にのっとり、敷地分割を行い、かつ接道を確保しようとした結果と考えられる。

表 3：建築基準法と道路法の関係

			道路法	
			公道(豊島区が管理)	私道(個人が管理)
建築基準法	1 項	1 号		雑司が谷 1～3 丁目にはなし
		2 号	雑司が谷 1～3 丁目にはなし	
		3 号	雑司が谷 1～3 丁目にはなし	
		4 号		雑司が谷 1～3 丁目にはなし
		5 号		
	2 項	都市計画区域が指定される以前から存在した[4m 未満]の道で特定行政庁が指定したもの		
	3 項	2.7～ 4m 未満	雑司が谷 1～3 丁目にはなし	
	4 項	6m 未満	雑司が谷 1～3 丁目にはなし	
	通路	建築基準法に指定されていない道路を豊島区は通路と称している。		

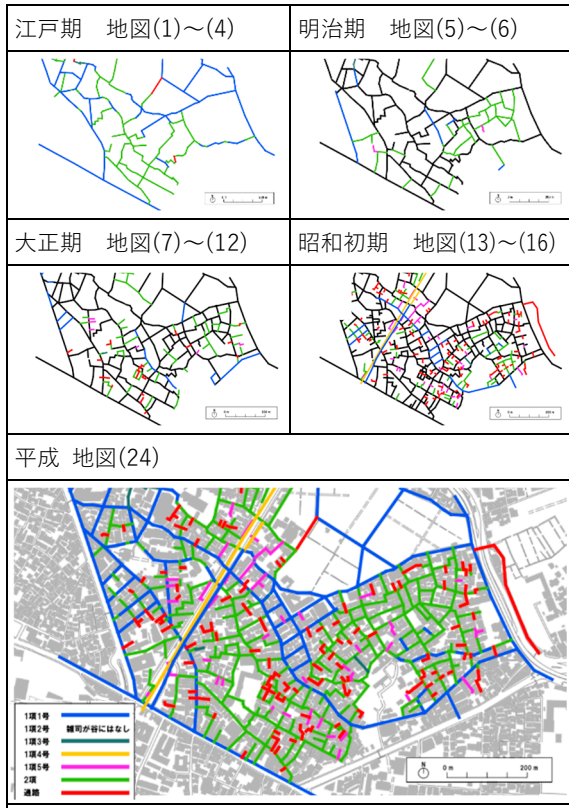


図3：建築基準法42条による道路分類と道路形成時代

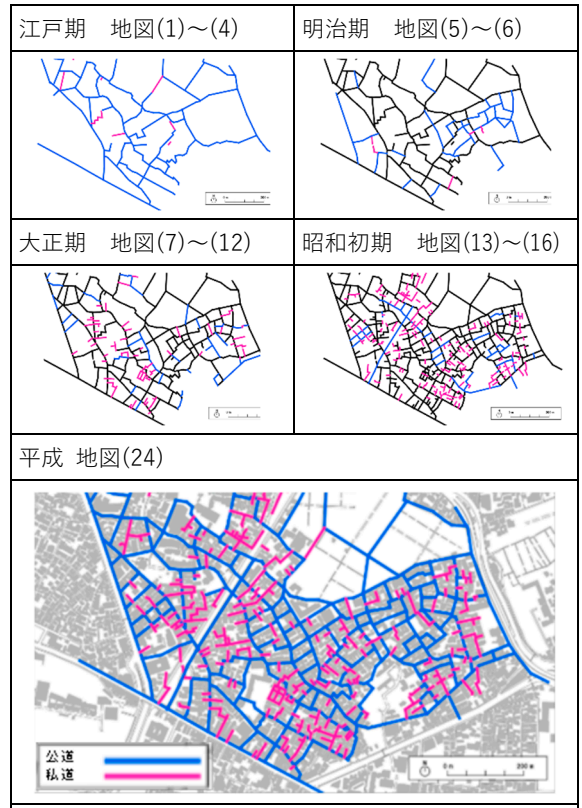


図4：時代別公私道

4. 狭隘道路の形成過程

図6は、道路幅員と道路台帳から確認できた道路認定状況を示したものである。対象とした雑司が谷1～3丁目の道路が、2項道路か通路かで構成されていることが確かめられる。2項道路は51.8%と約半数を占める。雑司ヶ谷研究9^{注2)}にも示した通り公道の35.2%、私道の16.7%が2項道路あたる。雑司が谷で特徴的なのは、建築基準法上の道路ではなく通路として認定されている道が18.5%を占めることである。そのうちの%と7割弱が2m未満の幅員であり、狭隘な道がかなりの割合で存在することがわかる。2項道路のうち、幅員が3m～3.9mのものが20.4%と全体で最も割合として多く、雑司が谷の道の2割を占める。2項道路と通路の2m未満の幅員を合わせると同じく2割を占める。

建築基準法42条1項1号道路は全体の22.5%にしか及ばず、これは公道のうちでも37.8%である。公共が所有する4m以上の幅員の道が、町の中にあ

る道の1/4以下であり、かつ公道のうちでも半数に満たない。既に雑司ヶ谷研究9にて、623本中371本が公道割合でいうと59.6%を占め、そのうち江戸期・明治期に形成された道路は41.6%に値することを示してあるが、図4・図5と併せて確かめられる通り、江戸期明・明治期からある道が、雑司が谷地域内で町を通りぬけることのできる数少ない道であり、公道である。江戸期・明治期からのものが多いため早くから建物が沿道に建ち、旧法に基づいて建物の建設が進んだために、狭隘状態が固定化したものと考えられる。図5より短い間隔で4m以上の道を多数確認でき、建物の更新に合わせて、現在は少しずつ拡幅が進んでいることがわかる。

雑司が谷の私道には1項5号道路、2項道路、通路の3種類があることは表3に示した通りである。1項5号道路は、30本指定されている道がある幅員が4m未満の道が17本ある。このうち16本の周辺は大正期には既に住宅地であり、9尺の建築線による宅地化が行われたものと考えられる。しかし、1

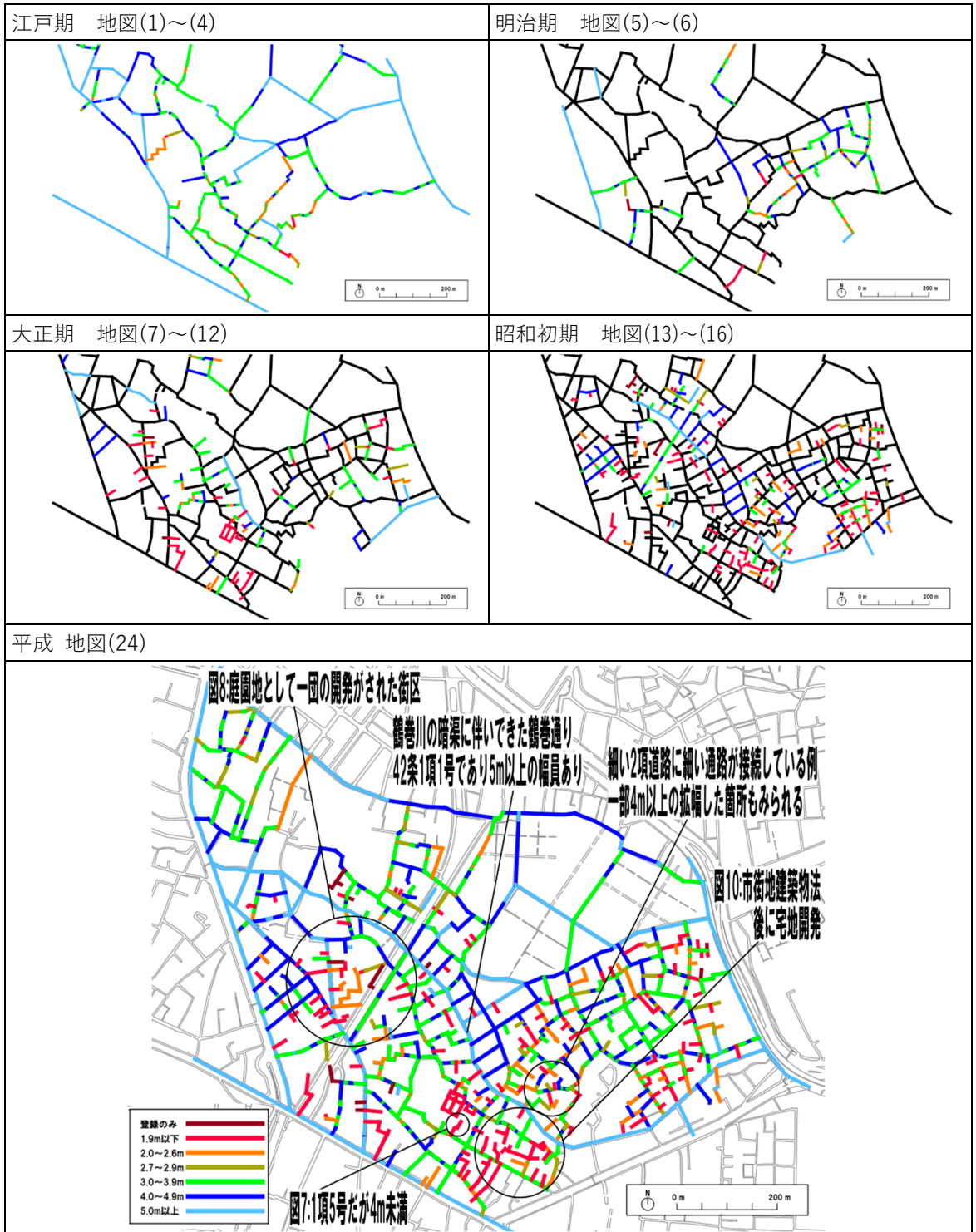


図5：時代別道路実態と道路幅員（2018年豊島区道路台帳）

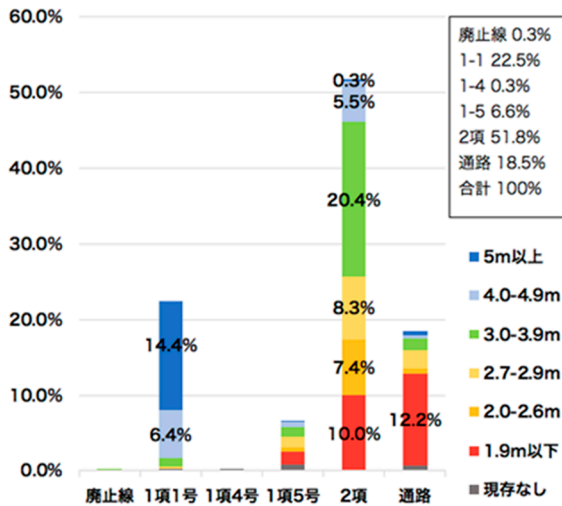


図6：道路幅員と道路認定

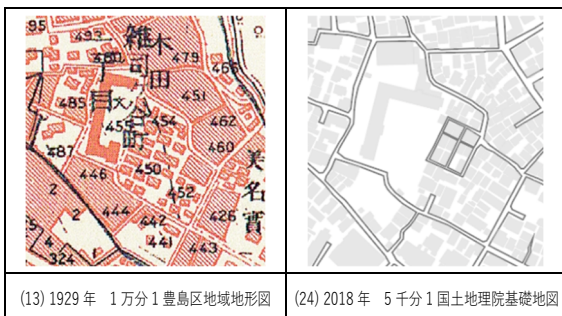


図7：現状1.9m以下だが1項5号に指定されている道

項に指定されているということは、4mを満たしてははずであるので、不自然である。豊島区職員へのヒアリング調査に基づくとその理由は2つ考えられ、①建築基準法制定当時は竣工確認が行われなかったために申請図面とは異なる建築が行われた、②指定当時は4mあった位置指定道路内に塀を建てたものと推測される^{注3)}。図7 高田小学校東側の土地は2.7m以上で1923年に建築線の指定を受けたが^{注1)}、現状2m未満なのは1項5号で幅員4m未満の道が指定されている上記理由①②と推測する。

次に42条2項に着目する。通路に指定されている道より距離が長く、建替え等で拡張されたと考えられ4m以上の部分も散見される。1919年に市街地建築物法で2.7mの規定ができたので、地図(7)より1919年以前に宅地だった場所と本納寺の南側や二丁目の南側が一致する。これらは市街地建築物法制

定前にできた道のため、2.7m未満でも自然である。

図8に示すように1909年時点では宅地化されておらず、雑樹の場であったようだ。しかし1916年の地図(7)では一気に宅地化が進み、庭園地として一団の開発がされたことが示されている。この頃の地図では、通路がどこにあったのかは明記されていないが、1984年の地図(19)に、現状とほぼ同形状に道が示されている。豊島区史¹⁵⁾に借家で生計をたてていた人がいたという記述があることから大地主が保有する一つの土地に複数の借家が建っていた図9に示す庭先木賃のようなものと考えられる。団地的居住空間の中が2項に指定され認定道路化したと言えよう。なお、1919年以降に宅地化したにも関わらず2.7m未満の道が多い図10に示す地域に着目したところ、市街地建築物法施行令16条の敷地の定義の問題であると考えられる。一つの敷地内に複数の建物がありその間の道は市街地建築物法の道路ではなく現在の通路のような存在だと推測できる。

いずれの道も、現在私道の狭隘道路の部分が大半を占め、住民により管理されている。

最後に通路に着目する。公道に接しておらず2項道路に接続しているものが多い。私道の通路110本のうち、幅員2m未満のものが82%であることは雑司が谷研究9にもし指摘したが、図8でも確かめられるように狭い道に狭い道が接続するという形となって町を構成している。なお、建築基準法が制定された1950年以前に宅地だった場所と一致しており、現在も宅地である。図5にその一例箇所を示す。2項道路の申請最低幅員1.8mに満たない通路もあるため今後の建て替え、新築での建築基準法適合が難しい。

5. まとめ

東京をはじめとした大都市には、現在でも多くの狭隘道路が残る。本稿では雑司が谷の過去の地図を辿ることで、その形成経緯を明らかにすることができた。江戸時代に寺社やお抱え屋敷等がある町で、その後も農地、雑樹地を経て宅地化が進展する中で、以下のような形成経緯を確認することができた。

- ・江戸時代からある道は、地形に合わせた曲線を描く形で現在でも存在する。
- ・江戸時代からの道は、明治末期から大正期の宅地化の際に、当時の法令に合わせて建物が立て込んだことで形成された結果として、狭隘

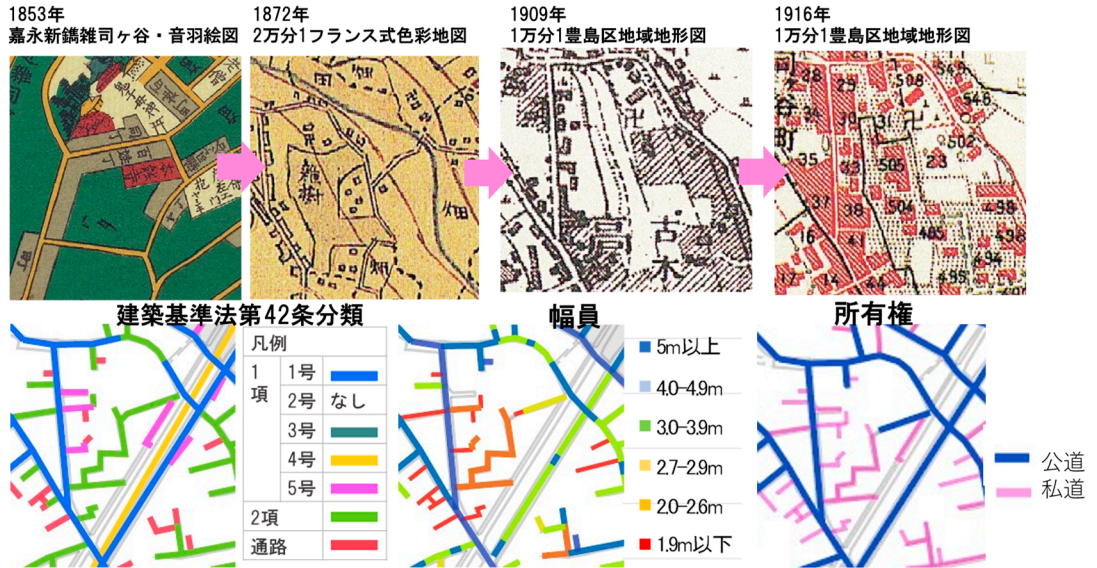


図8：庭園地として一団の開発がされた街区の開発経緯と道路幅員

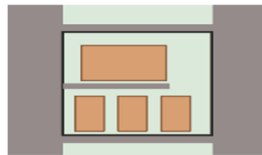


図9：庭先木質イメージ図

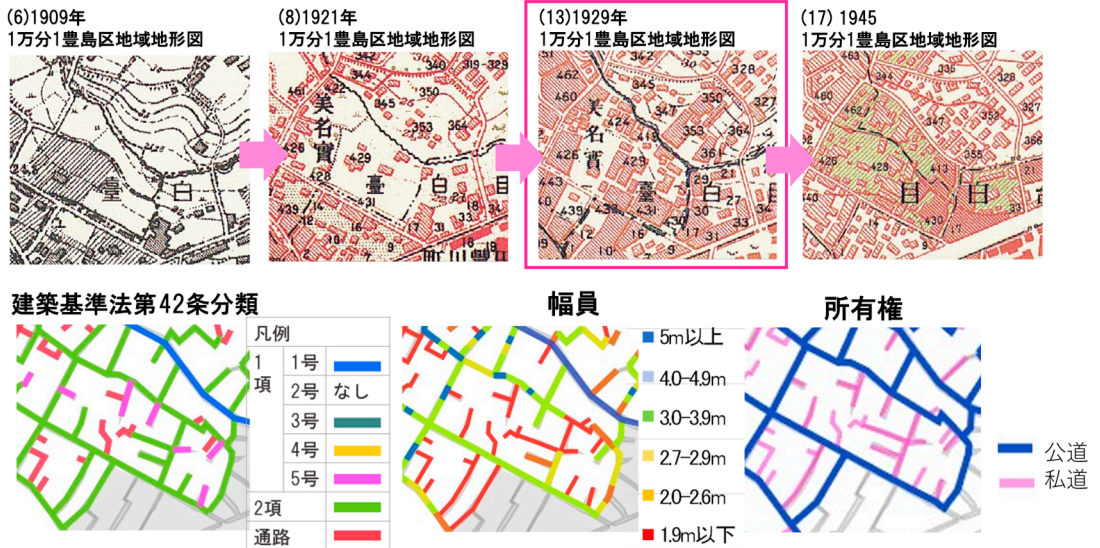


図10：市街地建築物法施行後に開発された宅地の道路概要

道路となった。

- ・全体に狭隘でかつ建築基準法第42条2項道路として認定されている道が多く、通路として扱われる道は1.9m未満の道も多い。
- ・宅地については、庭先木賃と呼ばれるような賃貸住宅経営の積み重ね等を経て、今日の法令に基づくと狭隘道路と総称されるような、狭い行き止まり私道が数多く形成されてきた。

以上、雑司が谷における狭隘道路の構成は、日本が近代化する中で、都市の居住密度が上がる過程で形成されたものであることが確かめられた。これらの狭隘道路そして行き止まり道路は、現行法では、車両の通行が困難で、また防災上の課題として解消が求められているが、通過交通の少ない地域内の道として住民の生活の場となり、また他の町と異なる景観を作り出している。こういった歴史的な経緯を踏まえた道路空間の継承を、災害への備えと共存しながら、地域らしさ維持の場として住民への共有と、判断の材料としての活用を期待したい。

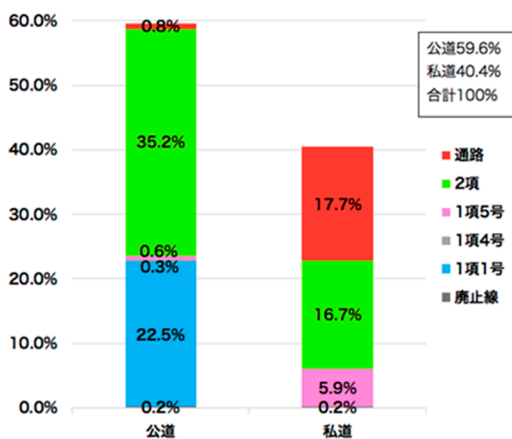
【付記】

雑司ヶ谷の領域は時代とともに変化している。本稿では現在の住居表示の雑司が谷の範囲を雑司が谷、それ以前の区域を雑司ヶ谷と表現する。

【注】

注1) 2018年10月26日実施一丁目住民9人へのヒアリング調査より

注2) 雑司が谷研究9（参考文献3）に以下の図を掲載してある



建築基準法42条道路区分と公私区分

注3) 2018年12月21日豊島区職員へのヒアリング調査より

【参考文献】

- 1) 東京都都市整備局市街地整備防災都市づくり課, あなたのまちの地域危険度 2018 地域に関する地域危険度測定調査〔第8回〕, 2018/3
- 2) 泉水花奈子, 密集市街地における一戸建て住宅の境界領域利用実態—雑司が谷を対象として—, 2012 年度日本女子大学卒業論文, 2013/3
- 3) 杉浦美鈴・大山祐加子・葉袋奈美子・原わかな, 雑司が谷研究9 明治期以降の宅地形成の歴史, 日本女子大学紀要 家政学部 第67号, 2020
- 4) 雑司が谷遺跡調査団, 豊島区遺跡調査会調査報告 22 雑司が谷Ⅲ—雑司が谷遺跡(東京地下鉄副都心線雑司が谷駅地区)の発掘調査— 第1分冊(全4冊), 豊島区遺跡調査会, 2010/12/10
- 5) 豊島区郷土史料館, ミルク色の残像—東京の牧場展—, 豊島区教育委員会
- 6) 国土交通省国土計画局, 「国土の長期展望」中間とりまとめ概要, 2011/2/21
- 7) 豊島区郷土資料館, 豊島区郷土資料館・新宿区立新宿歴史博物館・板橋区立郷土資料館・北区飛鳥山博物館◇四館合同企画◇〈トラム(路面電車)とメトロ(地下鉄)〉1998年7月18日(土)~11月1日(日)豊島区立郷土資料館収蔵品展 1998年9月26日(日)~11月1日(日)軌道・無軌条, 地下鉄道展示解説書, 1998
- 8) 加藤仁美・石田頼房, 明治期の建築規則等における道路・道路規定についての考察, 日本建築学会計画系論文報告集第367号, 1986/9
- 9) 過去の法令等 市街地建築物法 市街地建築物法施行, <http://www2.ashitech.ac.jp/arch/osakabe/semi/hourei-frame.html?buppou?t8,2018/12/5>
- 10) 内閣府建築基準法, <http://www.bousai.go.jp/shiryou/houritsu/023.html,2018/11/27>
- 11) 豊島区土木管理課道路台帳グループ, 豊島区道路台帳, 2018/07 閲覧
- 12) 豊島区区有通路条例, http://www1.g-reiki.net/toshima/reiki_honbun/1600RG00000626.html,2018/1/6
- 13) 電子政府の総合窓口道路法, http://elaws.e-gov.go.jp/search/elawsSearch/elaws_search/lsg0500/d

- etail?lawId=327AC1000000180_20180929_430A
C0000000006&openerCode=1,2018/12/4
- 14) 豊島区公式ホームページ私道の工事に関する
助成について, <https://www.city.toshima.lg.jp/329/machizukuri/doro/1511261340.html>
- 15) 東京都豊島区, 豊島区史通史編二, 東京都豊
島区, 1983/11/30
- 16) 建築知識編, 見るだけで分かる! 建築基準法
入門, 株式会社エクスナレッジ, 2014/5/22
- 17) 大脇賢治, イラストでわかる建築基準法, 株
式会社ナツメ社, 2007/7/11
- 18) 豊島区土木管理課道路台帳グループ, 豊島区
道路台, <http://www.city.toshima.lg.jp/325/machizukuri/doro/002293.html>, 2018/12/20
- 19) 内閣府建築基準法, <http://www.bousai.go.jp/shiryou/houritsu/023.html>, 2018/11/27
- 20) 建築基準法施行令, http://elaws.e-gov.go.jp/search/elawsSearch/elaws_search/lsg0500/detail?lawId=325CO0000000338_20180401_429CO0000000156&openerCode=1#B, 2019/1/15
- 21) 豊島区区有通路条例, http://www1.g-reiki.net/toshima/reiki_honbun/1600RG00000626.html, 2018/1/6
- 22) 電子政府の総合窓口道路法, http://elaws.e-gov.go.jp/search/elawsSearch/elaws_search/lsg0500/detail?lawId=327AC1000000180_20180929_430A
C0000000006&openerCode=1, 2018/12/4
- 23) 2013 加藤仁美・石田頼房, 明治期の建築規則等
における道路・道路規定についての考察, 日
本建学会計画系論文報告集第 367 号 pp.44~54,
1986/9
- 24) 市街地建築物法, <http://www2.ashitech.ac.jp/arc/h/osakabe/semi/hourei-frame.html?buppou?t8>
- 25) 足利工業大学建築額コース刑部研究室, 2018/1
/6 過去の法令等, <http://www2.ashitech.ac.jp/arc/h/osakabe/semi/hourei.html>
- 26) 足利工業大学建築学コース刑部研究室, 2015,
2018/12/5
- 27) 大河原春雄, 建築法規の変遷とその背景—明
治から現在まで—, 鹿島出版会, 1982/6/5